



連載16回

志茂田景樹の「あのころ……」

御茶の水橋口は鬼門だった

志茂田景樹（作家・白門40年会会員）

わが母校は素敵な大学だったなあ。何しろ授業に1回も出なくて

も追再試験を受ければ、学年の正規の試験より優しい問題で点数も

甘くしてくれて単位をくれた。それでも結果的に2年留年したが、

それは落とした単位があまりにも多く、大学側になるべく負担をか

けまいという愛校心も働いて、2年に分けて完済、いや完璧に取得

しようと思つてのことだった、と記憶している。

定かな記憶とは言いがたいが、それはともかく留年1年目のボクは、映画のエキストラ稼業に忙しく、あちこちの撮影所に通つてい

く通つた。昼食を撮影所の食堂で

とつていると、石原裕次郎や、小林旭が取り巻きを連れて隣のテ

ブルにくることがあった。裕次郎がテ

ブルに足を上げ、洋モクを吹かしたことがあつて、こいつ思

い上がつていると反発した覚えがある。ほんとうは羨ましかつたん

だろうね、おれも早くこういう身分になりてえ、と。

そんな日の翌日は、お茶の水で下りてもお茶の水橋口の改札から

多く出たかなあ。いこい、と言つたかな。すぐ角にあるパチンコ屋

に入つて、玉の出がよくなければタバコに換えて、すぐ隣の王城と

エキストラ仲間がたまり場にして

いた時期があつて、メンツが揃うと麻雀屋へ、それでその日は終わ

り。何やつてんだかと反省しないこともなかつたが、お茶の水橋口は

僕にとつて鬼門だった。この前、久しぶりにお茶の水橋

口を出て明大の前を通つたら、凄

い校舎になつていたので驚いた。駿河台に居すわつてこの大学は得

をしたんじゃないか。いまどきの受験生は東京に出てきてまで草木

の匂いのする大学には通いたくない、という意識だもの。都心にデ

ンと構えていたほうが人気が出る。でも、今の学生はどこで憩つて

いるんだろう。学生臭もなくなつて



駿河台校舎中庭でのフォークダンス

